

<あづみ証言 2.>

湯浅から電話があり、石岡から「高井と来るそうだよ。」と聞いた。2006.05.07 当日、14:30 二人が来宅、湯浅が「今日は手打ちで来ました」と言い、私は意味が判らなかったが母屋の居間へ通した。その時の父との話はほとんど聞いていないので、その時の質疑応答についての内容の誤りなどは判らない。ただし、先にも書いたように、石岡は正常な状態ではなく、長い話に耐えられない状態であったため、内容を判っていなかったと思われる。判らなくなると何でも「そうか」とか「分かん」。面倒になると「分かった。分かった」と言っていた。

当時、石岡は最愛の母を亡くして、身体も悪く精神的にも弱くなっていた。そういう人を捕まえて、50 年以上も前の話をする事自体常識を逸している。

その頃は石岡を慰めるためと母の教えを守るために、来客があると事前に分かった段階で、酒宴の用意をしていた。(石岡は来客をととても喜び、必ず酒をお出しするように私に命じもしていた。車で来ている来客にまで酒を勧めて困ったものだった) 以上のことで、「石岡は座敷で酒宴の用意をして…」は間違いである。しばらく話をしている間に、私が座敷に酒宴の用意をして、招いたのである。その上、高井が訪ねた時だけ歓待されたように書かれている文章は納得がいかない。

その後は、私も同席して接待をした。高井は「まさかこんな展開になるとは思ってもいなかった」と言った。私はことの成り行きが全く分かっていなかったので不思議に思った。石岡は「わしが悪かった」と言っていたが、なぜ謝らねばならないか理解出来なかった。湯浅は「これで手打ちなんだから、今後は一切この話はしません。高井さんも言いたいことは言えた訳だし、手打ちと言う事で来たのだから、これで一切を水に流しましょう」と言うようなことを言って 19:00 帰った。その後で石岡に「お父さんは悪いことなどしてないのに、なんで謝らなければならないの!」と言ったところ石岡は「謝っとりやせんよ」と言っていた。どういう事情か分からぬままだったが「今後一切この話はしない」と言われたので、これ以上聞く必要はないと思った。

2 日後、高井氏葉書が来た。内容は来訪時のお礼と「あのことは忘れられない」と言うようなことが書かれており、<一切を水に流す>と言ったことは嘘だったのだと分かった。石岡が可哀そうでその葉書を渡すことは出来なかった。